

山地の稜

宮沢賢治

高橋吉郎が今朝は殊に小さくて青じろく少しげんさうにこつちを見てゐる。清原も見てゐる。たった二人でぬれた運動場の朝のテニスもさびしいだらう。そのいぶかしさうな眼めはどこかへ行くならおれたちも行ききたいなと云いふのか。それとも私が温床へ水でも灌そそぐところかも知れないと考へてゐるのか。黄いろの上着を着たつてきつと働くと限つたわけぢやないんだぞ。私は今朝は一寸ちよつとの間つめたい草を見て来たいんだ。だから一人だ。つれて行かない。大事なんだから。

温床とこはれた浴槽よよくさう。

こゝの細い桑も今はまったくやはらかな芽を出した。

その細桑の灰光は明らかで光ってそしてそろってゐる。  
すぎなは青く美しくすぎなは青くて透明な露もと  
まつて本当に新らしいのだ。

右手の奥の方では寄宿の窓のガラスも光る。黄ばら  
のひかり、すぎなと砂利。

これはレールだ。

それから影だ。手帳。

ゆっくり行けば朝のレールは白くひかる。強くて白  
くかゞやく、

子供のうすい影法師、私は線路の砂利も見る。  
ごくあたり前だがぬれてるやうな気もします。

工夫がうしろからいそいで通りこす。横目でこつちを見ながら行く。少し冷笑してゐるらしい。それでもずんずん行つてしまふ。万法流転。流れと早さ。も一人あとから誰か来る。うしろから手帳をのぞき込まうとするのか。それでも一向差支へはない。やつぱり工夫だ。ところが向ふのあの人は工夫ではなかつたんだな。大工か何かだつたな、どてをのぼつて草をこいで行つてしまふ。

この横が土木の似鳥さんの泊つてゐる家だ。女もゐる。そのうちの前で手帳なんかをひろげたつて一向氣取つたわけぢやない。

(紙の白と直立。)

一向気取ったわけぢやない。しななければならなくてしてゐるんだ。けれどももしこれがしんとした蒼黝あをぐろい空間でならば全くどんなにいいだらう。それでも仕方ない。

低い崖がけと草。草。東の雲はまっ白でぎらぎら光る。

虎戸とらどの家だ。虎戸があすこの格子からちらつとこつちを見たかもしれない。けれどもどうも仕方ない。あすこの池で魚を釣つてゐるのは虎戸の弟だ。たしかにさうだ。

立派だ。この雲のひかり Sun-beam がまさしく今



××××××××××とき××××××××××××××  
××××××××××××××××××××××××××××××  
××××××××××××××××××××××××××××××

「はあ、おありがどござんす。お蔭でまめしくて居り  
あん「#「ん」は小書き」す。」純哉さんもおまめしくて  
と云はうかな、いや家から出てどこへ行ったかわから  
なかったと云ふんだ。この辺を夕方しよんぼり行つた  
り来たりしてゐたのを見た人もあると云つた。台湾、  
やっぱり云はない方がいゝ。

「お内のお母さんだちと始終ご一緒して居りあん「#  
「ん」は小書き」す。」純哉さんの妹は唇くちびるが紫で心臓が  
悪かつた。この人も少し紫だ。

「はあそでござんすか。」この人の鼻はけはしくて写楽のやうに見えるけれどもどこか立派なところもある。

「それがらおうちのあねさんおあん」「#」「ん」は小書き「ばい悪いふでござんすたなちよでお出やんすべなす。」

「はあ、あんまり変らなござんす。」

「おりやの米子よねこどもいっつもお話し申してあん」「#」「ん」は小書き「す。」

ありがたう。そんなにはかの人までが考へてみられるのかな、おれでさへ昼学校では大抵まぎれて忘れてゐるのだ。

「ほんとにおありがとござんす。」おじぎをしたので



この人はもう行かうとする。いまはお礼を云ったのだ。もう一ぺん云はう。

「ほんたうにおありがとござんす。暖くなつたらと思つてゐあん「#「ん」は小書き」すたどもやつぱりその通りで善ゆぐもならないで。」

「まあんつたびだび米子どもお話してあん「#「ん」は小書き」すすか。」

「おありがとござんす。」

「おありがとござんす。」

汽車はのぼつて来るのぼつて来ると子供が云つてゐる。人は影と一緒に向ふへ行く。私も行く。

雲が白くて光つてゐる。早池峰はやちねの西どなりの群青ぐんじやうの山の稜りやうが一つ澱よどんだ白雲に浮き出した。薬師岳だ。雲のために知らなかつた薬師岳の稜を見るのだ。

今日も鳥が啼ないてゐる。お城の方へ行かうか。おしろには前の日曜のさみしさがまだ浸しみ込んで残つてゐるからだめだ。さうして見るともつと東の遠くの方まで出かけよう。

製板所も見えます。向ふから工夫がひとりやって来る。ちやうど私にぶつつかるばかりだ。私は線路をあゝるいてゐます。一寸ちよつとでも挨拶あいさつしよう。けれどもそれもをかしい。たゞ私はみちを避けよう。さうだ。この人

は何とも思つてゐないのだ。ずるぶんみんな歩くのだからすっかりなれてしまつてゐるのだ。それから瀬川の鉄橋のたもとから髪の毛の長いせい、の低い太った人が出て来ます。黒沢のやうにも見える。黒沢にしては何だか顔が厳しいやうだ。やつぱりさうだ。

「今日何処まで。」

「はあ、すぐそこまで、お通しやてくなんせや。」

「はあ、いゝえ、向ふ側さすか。」

「はあ。」

鉄橋のこつち岸の石垣いしがきを積み直すのだ。今日はずるぶん人が来てゐる。請負の「二字分空白」さんも居る

だらう。ずうつと足の下だ。こっちは橋の上を行くのだから一向かまはない。南の方はそら一杯に霽はれた。土耳古トルコ玉だ。それから東には敏感な空の白髪が波立つ。光の雲のうねと云った方がいゝ、南はひらけたトウクオイス、東は銀の雲のうね、書いて行かうか。けれどもどうも斯かう云ふ調子にのった語ことばは軽薄でいけない。それでもやっぱり仕方ない。

もう鉄橋を渡って行かう。鉄橋を渡るときポケットに手を入れて行くのはいゝにはいゝんだ。下でも人が見てゐるし。けれどもやっぱりごく堅実に渡って行くのだ当然だ。人はあるある。あの二つの顔は知ってゐる。

る。枕木まくらぎはうすい灰色曲つたり間隔もずるぶん不同だ。水がたしかに下を流れてゐるけれどもおれはそれを見ようとはしない。気にかゝるのは却かへつて南のトークオイスの光の板だ。

渡れ渡れ、一体これではあんまり枕木の間隔がせますぎるのだ。大股おほまたに踏んで行かない。もう水の流れる所も通つたし、ずるぶん早い。この二枚の小さな縦板は汽車をよける為ためのだな。こゝで首尾よくよけられるだらうか。もし今汽車がやって来たらはねおりるかぶら下るかだ。まづすばやく手帳と万年筆をはふり出すことだ。それからあとはもう考へなくてもいゝぞ。

すぐ向ふ岸だ。砂利の白や新鮮なすぎな。

着いた。立派な野菜だごぼうや何か。

すなつち。

馬は黒光り、はねあがる。はねあがれば馬は竜だ。

赤い眼をして私を見下す。

底本…「新修宮沢賢治全集 第十四卷」筑摩書房

1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行

入力…林 幸雄

校正：mayu

2003年1月10日作成

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、  
校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで  
す。